

【研究論文】

# 国語科におけるタブレット活用の在り方 —小中学校における実態と課題をふまえて—

三田村 雅人

【要約】本研究の目的は、質問紙調査によって、小学校、中学校の国語科の授業におけるタブレットの活用時間、有効な活用領域や場面、活用のメリット、デメリットの意識などについて調査するとともに、活用における悩み、課題なども明らかにし、効果的な実践例などをふまえて、国語科におけるタブレット活用の在り方を検討することにある。質問紙調査の結果、小中ともに6割以上の教員が年間の国語の時間の3分の1以上でタブレットを活用しているが、ほとんど活用しない教員もいるという格差が生まれており、効果的な活用方法がわからないなどの悩みを抱える教員もいることが明らかになった。小学校では「授業の効率化」、中学校では「学習意欲の向上」などをメリットとして感じ、「書くこと」「読むこと」の領域、「共有」「表現」などの場面で小中共同してタブレットをよく活用しているが、「教員の負担増」「教員のスキルの格差」などをデメリットとして感じていることも明らかになった。質問紙調査の結果や文部科学省の示す国語科における活用事例などをふまえ、国語科における効果的なタブレット活用の在り方について考察した。

キーワード：小学校、中学校、国語科、タブレット、活用

## 1 はじめに—研究の目的

小学校教諭一種免許状取得を目指す本学の学生は、小学校教育実習前に本学の連携協力校である小学校の授業参観を行うが、参観をした学生は一樣に、小学校の授業においてタブレット（タブレットとは画面に直接触れて操作する、携帯できるPCを指す）の活用が進んでいることを驚きを持ってとらえ、タブレットが効果的なツールであることを実感している。その一方で、教師の指示以外のことにタブレットを使う児童、使い方がわからずとまどう児童の姿を見て、どう対応すべきか考えたり、タブレットやスクリーンのみを使う授業とタブレットと黒板、ノートやワークシートを併用する授業はどちらがよいのか、タブレットは個別の学習を進める上では有効で、画面上では意見の共有がなされているが、対面での話し合い活動は十分にできているのだろうかなどの率直な疑問を持ったりしている。教育の情報化、特にタブレット等のICTの効果的な活用が今、教育現場で求められているものであることを理解しながらも、学生なりにそのメリット、デメリットをとらえ、過渡期において、タブレットの効果的な活用方法を模索している教育現場の実態を感じとっている。

2019年、文部科学省は「教育の情報化に関する手引き」<sup>(1)</sup>を発表した。「はじめに」においてSociety5.0時代の到来が予想されている今、「次代を切り拓く子供たちには、情報活用能力をはじ

め、言語能力や数学的思考力などこれからの時代を生きていく上で基盤となる資質・能力を確実に育成していく必要があり、そのためにも ICT 等を活用して、「公正に個別最適化された学び」（中略）を実現していくことが不可欠である」としている。また、第1章「教育の情報化について」において、「教育の情報化」を「情報通信技術の、時間的・空間的制約を超える、双方向性を有する、カスタマイズを容易にするといった特長を生かして、教育の質の向上を目指すもの」と定義し、①情報教育②教科指導における ICT 活用③校務の情報化の3つの側面から構成されている。

2019年に文部科学省が発表した「GIGA スクール構想の実現へ」<sup>(2)</sup>では、「1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、特別な支援を必要とする子供を含め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育 ICT 環境を実現する」としている。

日本は国際的に見て、教育の情報化が遅れていることが明らかになっている。「OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）～2018年調査補足資料」<sup>(3)</sup>の「1週間のうち、教室の授業でデジタル機器を使う時間の国際比較（2018年）」によると、日本は、国語、数学、理科で OECD 加盟国中最下位、国語科においては、83%がデジタル機器を利用していないという結果になっており、児童生徒1人1台の端末の活用を中心とする教育の情報化の推進は喫緊の課題であることがわかるが、この課題解決に関していくつか懸念される点がある。かつて、プロジェクターや教師用デジタル教科書を中心とする ICT 活用推進の必要性が教育現場で課題になっていた2010年ごろ、筆者はE市教育委員会の指導主事として市内小中学校を巡回し、授業における ICT の活用について指導助言を行っていたが、現場の教員からは、「ICT はわかりやす過ぎる、児童がわかったような気になってしまうから使いたくない」、「機器の操作は苦手であり、使いこなせない」、「多忙な中で ICT の活用まで研究できない」、「ICT を活用しようと思うと、それが目的化してしまう」などの声が出ていた。実際、参観した授業においては、手段であるはずの ICT 活用が目的になっている授業が見られ、苦手意識などから教員による ICT の活用の格差が生じていた。GIGA スクール構想のもと、児童生徒1人1台のタブレットという環境が整えられ、現場の教員には ICT を活用した授業づくりが求められているが、多忙さ、苦手意識、活用が手段ではなく目的になっているなどの理由から、タブレットを活用した授業づくりが進んでいないことや教員による格差が生じることなどが懸念されるのである。

そこで、本研究では、小中学校の国語科におけるタブレット活用について、その実態、意識、課題等についての調査をE市内の小学校の国語科主任、中学校の国語科教員に行い、その結果を分析考察することを通して、国語科におけるタブレット活用の在り方について考察することを目的とする。

## 2 質問紙調査の概要

質問紙調査の対象は、E市の小学校17校の国語科主任17人、中学校7校の国語科教員19人の計36人であり、小学校17人、中学校18人の計34人から回答があった（回収率94%）。質問紙調査の実施時期は2022年11月1日から11月30日である。E市では、小学校低学年はWindowsタブレット、小学校の中高学年及び中学校ではiPadが使用されている。小学校低学年以外はタブレットを持ち帰り可とし、ソフトとしてはMetaMoJiが導入されている。

調査内容は、国語科の授業においてどのぐらいの時間、どのような場面でタブレットを活用しているのか、国語科の授業のどのような場面や領域で活用すると有効か、タブレットのメリット、デメリットをどうとらえているかについての実態や意識を選択肢で回答するもの、活用における悩みや効果的な実践例などについて記述式で回答するものが主な内容である。調査に当たっては、調査内容の確認の上でE市教育委員会からアンケート実施の承諾を得た。E市小学校長会長、中学校長会長、小中学校国語部長に任意での調査協力を依頼し、調査の趣旨、調査内容、調査方法を説明して同意を得た。小学校国語科主任、中学校国語科教員に対しては、調査の趣旨、内容、方法を記載した文書を質問紙調査とともに配布し、各小中学校長から説明してもらうことで同意を得た。

## 3 質問紙調査の結果

### (1) 国語の授業におけるタブレット活用時間

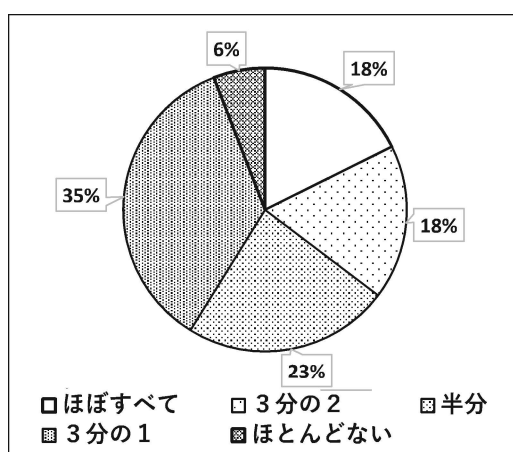


図1 小学校国語タブレット活用時間

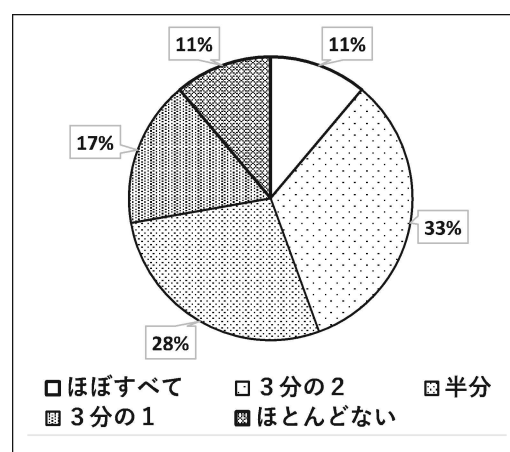


図2 中学校国語タブレット活用時間

図1、2は1年間の国語の授業でどのぐらいの時間、タブレットを活用しているのかという質問に対する小学校国語科主任（図1）、中学校国語科教員（図2）の回答の集計結果である。1年間の国語の授業のうち、全体の3分の2以上でタブレットを活用している教員は、小学校6人（35%）、

中学校8人（44％）となっており，中学校教員の方が国語の授業でタブレットを活用している時間の多い教員の割合が高くなっている．タブレットを活用している時間が国語の授業の中の3分の1以下の教員は，小学校7人（41％），中学校5人（28％）となっており，小学校の教員の方がタブレットを活用している時間数の少ない教員の割合が高くなっている．

また，1年間のほぼすべての国語の授業でタブレットを活用している小学校教員が3人（18％），中学校2人（11％）いる一方で，ほとんど活用しない教員も小中それぞれ存在し，小学校1人（6％），中学校2人（11％）となっている．

## （2）国語科におけるタブレット活用の効果的な内容，領域

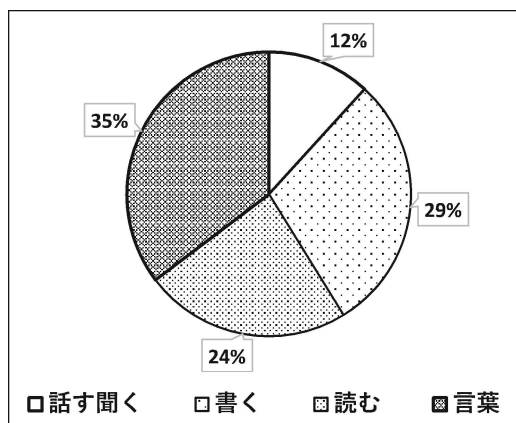


図3 小学校国語タブレット活用内容，領域

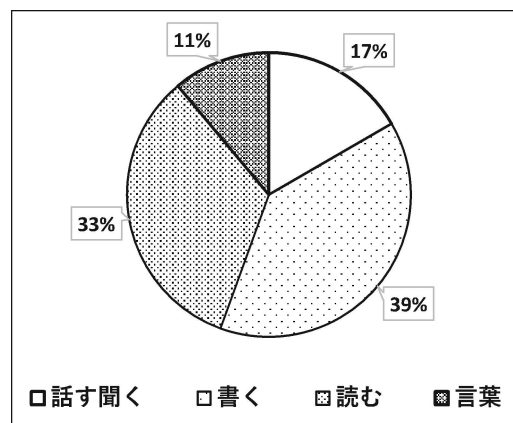


図4 中学校国語タブレット活用内容，領域

図3, 4は国語科「知識及び技能」の「言葉の特徴や使い方」, 「思考力, 判断力, 表現力等」の「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の内, タブレットを一番多く活用した内容, 領域は何かという質問に対する小学校国語科主任（図3）, 中学校国語科教員（図4）の回答の集計結果である．小学校国語の授業においては, 「言葉の特徴や使い方」が6人（35％）と最も多く, 「B 書くこと」が5人（29％）, 「C 読むこと」が4人（24％）となっている．中学校国語の授業では, 「B 書くこと」が7人（39％）と最も多く, 次いで「C 読むこと」が6人（33％）となっている．

また，国語科におけるタブレット活用の内容，領域に関しては，活用の実態に加え，タブレット活用が効果的だと考えられる内容，領域は何かという意識調査も行っている．小学校においては, 「B 書くこと」におけるタブレット活用が効果的であると回答している教員が最も多く7人（41％）, 次いで「A 話すこと・聞くこと」が5人（29％）となっている．中学校においては, 「B 書くこと」におけるタブレット活用が効果的であると回答している教員が6人（33％）, 同じく「C 読むこと」が6人（33％）と多くなっている．



### (3) 国語科におけるタブレットの効果的な活用場面

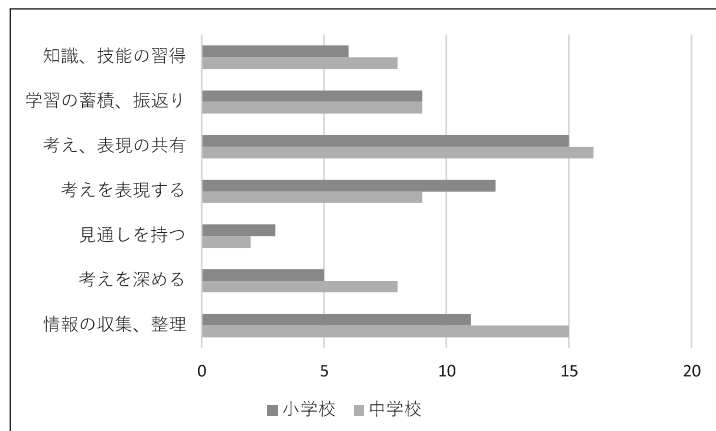


図5 小中学校国語科タブレット活用場面

図5は国語科の授業において、タブレットを一番多く活用した授業における具体的な場面は何かという質問に対する小学校国語科主任、中学校国語科教員の回答を比較した集計結果である(複数回答可)。小学校国語の授業においては、「考えや表現したものを共有する」が15人と最も多く、「考えたことを表現する」が12人、「情報の収集、整理」が11人、「学習の蓄積、振り返り」が9人となっている。中学校国語の授業においては、「考えや表現したものを共有する」が16人と最も多く、「情報の収集、整理」が15人、「考えたことを表現する」が9人、「学習の蓄積、振り返り」が9人となっている。

また、国語科におけるタブレット活用の具体的な授業場面に関しては、活用実態に加え、タブレット活用が効果的だと考えられる場面は何かという意識調査も行っている。小中ともに、「考えや表現したものを共有する」が最も多く(小17人、中16人)、次いで「情報の収集、整理」(小16人、中15人)となっている。「考えたことを表現する」「学習の蓄積、振り返り」を挙げている教員も小中ともに多い。

### (4) 国語科におけるタブレット活用のメリット、デメリット

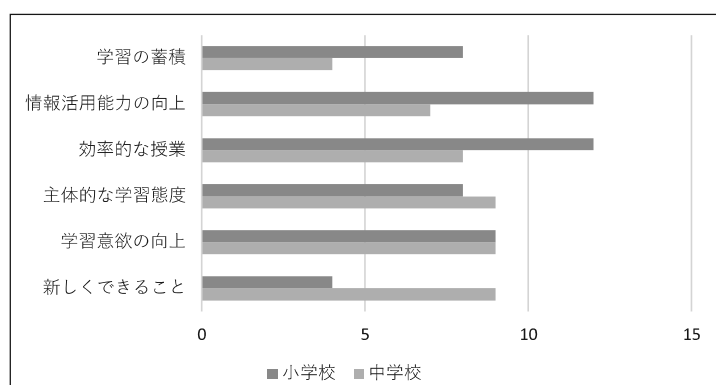


図6 タブレット活用のメリット

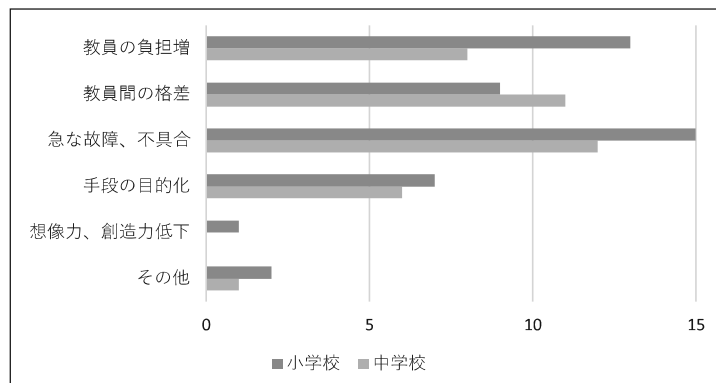


図7 タブレット活用のデメリット

図6、7は国語科の授業において、タブレットを活用するメリット（図6）、デメリット（図7）は何かという質問に対する小学校国語科主任、中学校国語科教員の回答の集計結果である（複数回答可）。小学校国語の授業におけるメリットとしては、「効率的な授業ができる」、「情報活用能力が向上する」がともに12人で最も多く、「学習意欲が向上する」が9人、「主体的に学習に取り組む」、「学習の蓄積ができる」がそれぞれ8人となっている。中学校国語の授業においては、「学習意欲が向上する」、「主体的に学習に取り組む」がそれぞれ9人と最も多く、「効率的な授業ができる」が8人、「情報活用能力が向上する」が7人となっている。また、タブレットの活用によって新たにできるようになったことを記述してもらったが、小中ともに、児童生徒の意見の集約と共有がすばやくできることが多く挙げられている。その他、作文や書写の学習における推敲と評価、音声や動画の蓄積と評価などがメリットとして挙げられている。

デメリットとしては、小中ともに「急な故障、不具合」を挙げる教員が最も多く、小学校15人、中学校12人となっている。小学校では「教員の負担増」が13人、「教員による活用時間や活用スキルの差」が9人、「タブレット活用が主目的となる」が7人となっている。中学校では「教員による活用時間や活用スキルの差」が11人、「教員の負担増」が8人、「タブレット活用が主目的となる」が6人となっている。「急な故障、不具合」以外では、小中ともに「教員の負担増」、「教員による活用時間や活用スキルの差」が多く挙げられている。

#### (5) 国語科におけるタブレット活用で困っていること、悩み

表1、2は国語科の授業において、タブレットを活用することに関して困っていることや悩んでいることを記述してもらったもので、小学校では17人中12人（内2人が複数記述）、中学校では18人中10人の記述があった。小中で共通しているのは、タブレットを活用する授業での児童生徒の学習モラルに関すること（落書き等、授業のねらいとは異なることをする児童生徒がいること）、タブレット端末の効果的な活用がわからないことや活用を考える余裕がないということ、タブレット端末を活用することで、これまで行ってきた言語活動が減少し国語の力をつけること

が十分できていないのではないかとということ、タブレットの操作やアプリに関することの4点が挙げられる。

表1 小学校国語タブレット活用に関する困り感、悩み

国語科の学力に関する困り感、悩み（3名）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・文字を手書きする機会が減った。</li> <li>・文字の正しい書き方や使い方の指導がおざなりになってないか不安。</li> <li>・文中から言葉を見つけて（手で）書いてまとめる力がつきにくくなった。</li> </ul>
国語科の授業づくりに関する困り感、悩み（3名）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字の予習復習や映像を見せる時にしか使っていないので、効果的な活用方法を知りたい。</li> <li>・タブレットを活用した教材づくりが大変。</li> <li>・タブレット活用の実践を考える時間の余裕がない。</li> </ul>
低学年に関する固有の困り感、悩み（5名）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・低学年ではタブレット画面上で文字を書くのに時間がかかる。</li> <li>・低学年はうまく扱えなかったりペンでいたずらをしたりする。</li> <li>・低学年には重い。</li> <li>・低学年はiPadでなく、1人1台でもないもので、いつでも気軽に使えない。</li> <li>・タブレット研修はiPadで行われるため、iPadを使用していない低学年担任は置いて行かれている不安があり、3年以上の授業に入るようになった場合心配。</li> </ul>
タブレット端末、ICT環境に関する困り感、悩み（3名）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・起動に時間がかかる。準備に時間がかかる。</li> <li>・学習支援ソフトのアクセス数に制限があって学校全体で使えない。</li> <li>・もっと国語に活用できるアプリを入れてほしい。</li> </ul>

表2 中学校国語タブレット活用に関する困り感、悩み

国語科の学力に関する困り感、悩み（3名）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・手書きで考えをまとめる時間が減っている。</li> <li>・文字の打ち込みに時間がかかり、手書きの方が早い。</li> <li>・自分の手で書く、面と向かって話すことが国語科では根底として大事だと考えるが、タブレットを使うことでそうした時間が減少している。</li> </ul>
国語科の授業づくりに関する困り感、悩み（3名）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な活用事例に当たり、多様なタブレットの使い方を学ぶ必要がある。</li> <li>・どういう利用の仕方をすれば深い学びにつながるのかわからない。</li> <li>・単元や領域によってはタブレットを活用できないことが多い。</li> </ul>
生徒の学習態度に関する困り感、悩み（2名）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒のタブレット活用に対する学習態度（モラル）に指導が必要。</li> <li>・関係のないことをタブレットで調べたり、落書きをしたりしている。</li> </ul>
タブレット端末、ICT環境に関する困り感、悩み（2名）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・操作がわからないので、ICT支援員がTTでいてほしい。</li> <li>・異動作で同じアプリを使っていない場合にデータ移行ができず作り直しになるのではないかと心配。</li> </ul>

## (6) 国語科におけるタブレット活用で効果的だった実践（小学校）

表3 効果的なタブレット活用実践例（小学校）

書くこと（8名）実践例
・「日常を十七音で」（6年）俳句の材料となる言葉のアイデアを共有ページに集約し、自分が使えそうなものを自分の創作に生かすことができた。作品はお互いのタブレットで見られるようにし、作品へのコメントもタブレットを用いて互いのページに記入した。
読むこと（4名）実践例
・「やまなし」（6年）物語に出てくるものの映像をメタモジで送り、理解の助けとする。初発の感想、5月と12月で読み取ったこと、題名や作者の思いについて読み取ったことをタブレットで共有し、班ごとに話し合った後全体で話し合う。
言葉に関すること（2名）実践例
・「かたかなで書くことば」（2年）ことば集めをしたあと、分類する際、デジタルワークシート内でテキストの移動をし、ことばのなかま集めをした。
話すこと・聞くこと（1名）実践例
・「山小屋で三日間すごすなら」（3年）自分の考えをタブレットに書いて、グループで共有し、さらによりアイデアがないか話し合った。

表3は、タブレットを活用した国語科の授業で最も効果的だった実践として小学校の国語科主任が挙げた15の実践例の内、主なものをまとめたものである。小学校では、「書くこと」が8例と最も多く挙げられ、「読むこと」が4例、「言葉に関する知識及び技能」が2例、「話すこと・聞くこと」が1例となっている。「書くこと」における言語活動としては、報告文・観察文が4例と最も多く、俳句・短歌（創作）が2例、パンフレットと説明書がそれぞれ1例となっている。「書くこと」における学習過程としては、情報の収集が5例と最も多く、共有が3例、推敲が2例、構成の検討が1例となっている。「読むこと」では、物語文が2例、説明文と伝記がそれぞれ1例、学習過程としては、共有が2例、精査・解釈と構造と内容の把握がそれぞれ1例となっている。「言葉に関すること」では、言葉集めと短文作り、「話すこと・聞くこと」では、話し合いの言語活動における話題の設定、情報の収集、内容の検討にあたる実践例が報告されている。

## (7) 国語科におけるタブレット活用で効果的だった実践（中学校）

表4は、タブレットを活用した国語科の授業で最も効果的だった実践として中学校の国語科教員が挙げた18の実践例の内、主なものをまとめたものである。中学校では、「読むこと」が13例と最も多く挙げられ、「書くこと」が3例、書写が2例となっている。「読むこと」における言語活動としては、短歌・俳句（鑑賞）が4例、古典が4例、説明文が2例、小説と随筆がそれぞれ1例となっている。中学校では一つの学習過程でのタブレット活用ではなく、単元の流れの中のいくつかの過程で活用されている実践例が報告されており、学習過程ごとのカウントは難しいが、考えの形成、構造と内容の把握において活用されている例が多く報告されている。「書くこ

と」の言語活動はすべて意見文であり、学習過程は情報の収集や構成の検討が多く報告されている。書写では、タブレットで撮った文字の画像を活用し、修正点の検討や比較の学習活動を行う実践例が報告されている。

表4 効果的なタブレット実践例（中学校）

読むこと（13名）実践例
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「オオカミを見る目」（1年）説明文における段落と段落の関係や役割をタブレットで図式化し、共有する。</li> <li>・「伊曾保物語」（1年）メタモジのクラスページで、二つの古典の物語の共通点を観点別に分類した。物語と教訓をもとに、学校生活に生かせることを一人一人考え、共有した。教科書に載っていない物語の読み取りを行い、個人ページで発表資料を作り共有した。</li> </ul>
書くこと（3名）実践例
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「根拠を明確にして書こう」（1年）新聞記事に合った写真を選び意見文を書く活動で、それぞれの写真の長所、短所をタブレット上に挙げて、それをもとに意見文を書き、書き上げたものを共有して読み合った。</li> </ul>
書写（2名）実践例
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「紅花」（2年）自分が書き上げた書写の作品の写真を撮り、直すところをタブレット上でマークする。試し書きと清書を写真に撮って比較する。</li> </ul>

## 4 質問紙調査結果の考察

### (1) 国語科におけるタブレット活用時間の実態

GIGA スクール構想において、タブレットを何時間以上活用するというような時間的な目標は設定されていない。タブレットは教育の質の向上のためのツールであり、誰もが必要な時に活用できるようになることがねらいである。GIGA スクール構想における1人1台のタブレット環境以前の2018年のOECD生徒の学習到達度調査（PISA）のデジタル機器活用調査と現在のE市の比較においては、国語科における週1時間以上の活用が日本では3.0%（OECD中最下位）、83%がデジタル機器を利用していないという結果に対し、E市では、年間の国語科の授業時間の3分の1以上活用している割合が小学校で94%（図1）、中学校で89%（図2）となっており、E市では多くの時間、活用しているように見える。ただ、令和4年度全国学力・学習状況調査<sup>(4)</sup>においては、授業でPCやタブレットなどのICT機器をどの程度使用したかの質問に対して、小学校児童（全国）は、ほぼ毎日が26.9%、中学校の生徒（全国）は、ほぼ毎日が22.4%と回答しているのに対し、E市で1年間ほぼすべての国語の授業でタブレット端末を活用している小学校の教員は3人（18%）、中学校教員は2人（11%）である。全国学力・学習状況調査の前述した質問は国語科授業に限ったものではないので、単純に比較はできないが、日常的にタブレットを当たり前前に使うことを目指すならば十分な数字とは言えない。また、ほとんど活用しない教員も小学校1人（6%）、中学校2人（11%）と存在し、教員による格差が生じていることも課題であり、埋めなければならない教員間格差が存在している。

## (2) 国語科におけるタブレット活用が効果的な内容、領域と場面

タブレットを一番多く活用した国語科の内容、領域は何かという活用実態の小学校と中学校の比較では、「書くこと」におけるタブレット活用の多いことは共通しているが、それに次ぐものには小中で差があり、小学校においては、「言葉の特徴や使い方」におけるタブレット活用の割合が高く（図3）、中学校においては、「読むこと」におけるタブレット活用の割合が高くなっている（図4）。タブレット活用が効果的だと考えられる内容、領域は何かという意識の小学校、中学校の比較においても、「書くこと」における活用が効果的だと考える教員が多いことは小中で共通しているが、小学校では「読むこと」におけるタブレット活用が効果的であると考えられる割合が低いのに対し、中学校では逆に「読むこと」の割合が高くなっている。これは、国語科における読解重視の意識の影響があると考えられる。国語科の学習指導においては、文学偏重、読解偏重という指摘がなされてきた。学習指導要領国語編の改訂に伴い、こうしたことも変化してきたが、それでも国語専科の教員である中学校国語科教員には、国語科の授業の中核は「読むこと」であり、タブレットを「読むこと」の授業で効果的に活用したいと考えている者が多いということが、質問紙調査結果に表れていると考えられる。実際、効果的な実践例として中学校で最も多く挙げられているのも、「読むこと」の授業実践例である（表4）。

タブレット活用の実態と意識の比較においては、小学校ですれが見られた。タブレット活用が有効だと考えている領域として、小学校では「B 書くこと」が最も多く、次いで「A 話すこと・聞くこと」を挙げているのに対し、活用実態としては、「言葉の特徴や使い方」で最もタブレット端末が活用されている。これは、小学校の教員は国語科だけを担当しているのではなく、各教科幅広くタブレットを活用することが求められるため、「言葉の特徴や使い方」という国語科の中では比較的活用しやすい内容で活用することが多いからであると考えられる。中学校においては、「書くこと」「読むこと」が意識、実態ともに多く挙げられ、意識と活用の実際にずれはない。

国語科の授業において、タブレットを最も多く活用した具体的な授業における場面については、「考えや表現したものを共有する」が小中ともに最も多く挙げられ、「考えたことを表現する」「情報の収集、整理」などが小中で共通して多くなっており、タブレット端末をよく活用する授業場面は小中で共通していることが明らかになっている（図5）。タブレット活用が効果的だと考えられる場面は何かという意識調査においても、小学校、中学校ともに、「考えや表現したものを共有する」が最も多く、他の項目も小中で共通している。タブレットを一番多く活用した具体的な授業場面については、小学校と中学校で意識と実態のずれ、小中の差はないことが明らかになっている。

## (3) 国語科におけるタブレット活用のメリット、デメリット

国語科の授業におけるタブレットを活用するメリットについて、小学校においては、「効率的な授業ができる」、「情報活用能力が向上する」がともに12人で最も多くなっているのに対し、

中学校においては、「学習意欲が向上する」、「主体的に学習に取り組む」が最も多くなっている（図6）。小学校では授業の効率という授業づくりへの効果、「情報活用能力」という児童の学力への効果が多く挙げられているのに対し、中学校では「学習意欲」「主体性」という生徒の学習態度や学習意欲面への効果が多く挙げられているという違いがある。中学校の国語科教員は、普段からいかに生徒を授業に主体的に取り組ませるかを課題としており、タブレット活用でこの課題に対応したいと考えていることが質問紙調査結果に表れていると考えられる。

タブレットを活用するデメリットについて、小学校、中学校ともに「急な故障、不具合」をデメリットとして挙げる教員が最も多く（小学校15人、中学校12人）、次いで「教員の負担増」、「教員による活用時間や活用スキルの差」が小中ともに多く挙げられており、タブレット端末活用のデメリットをどうとらえるかということについては、小中で共通している（図7）。「急な故障、不具合」については、故障、不具合が起こって授業が成立しなくなったらどうしようか、授業準備や学習の蓄積のデータが消えてしまったらどうしようかというタブレットの故障、不具合による影響の大きさゆえの不安であると考えられる。また、デメリットとして「教員の負担増」、「教員による活用時間や活用スキルの差」が小中ともに多く挙げられ、このデメリットはそのまま次に記す教員の悩みとなっており、対応が求められている課題である。

#### (4) 国語科におけるタブレット活用で困っていること、悩み

国語科の授業において、タブレットを活用することに関して困っていることや悩んでいることでは、小学校、中学校で共通して、児童生徒の学習モラル（タブレットへの落書き、関係ないことを調べる等）、タブレットの効果的な活用ができないこと、タブレット活用による弊害（対面で行っていた言語活動の減少等）、タブレット活用のためのアプリや支援体制に関することが挙げられている（表1, 2）。また、1年生から6年生と幅広い年齢の児童が学習する小学校には、低学年の児童の発達段階（タブレットに文字を書くのに時間がかかる等）や中高学年とは異なるICT環境（他の学年のようなiPadではないこと等）などから生じている、低学年特有の困り感、悩みがあることが明らかになっている。

デジタル庁・総務省・文部科学省・経済産業省による「GIGA スクール構想に関する教育関係者へのアンケートの結果及び今後の方向性について」<sup>(5)</sup>（2021）には、教職員からのGIGA スクール構想に関するアンケート結果が示されているが、子どもに関することでは、学習以外の用途に利用してしまうこと、情報モラルが不足していることなどが挙げられ、教職員自身に関することでは、担当教科でのICTの効果的な活用方法が分からないこと（約5割の教職員）、教職員向けのICT環境が整備されていないこと（約4割の教職員）への懸念が示されており、自由記述では、ICT研修の必要性が多く回答されている。今回の質問紙調査結果と共通する部分が多いが、特に、タブレットなどのICT機器を授業で活用したいが、効果的な活用方法がわからず悩んでおり、そうしたことに対する研修やサポートを望んでいる点に課題があることに注目すべきであり、対

応が求められていると考えられる。

## 5 国語科授業に求められるタブレット活用の在り方

### (1) 文部科学省資料におけるタブレット活用事例分析

文部科学省「教育の情報化の手引き」の4章「教科等の指導における ICT の活用」には、「A 一斉指導」「B 個別指導（B1 から B5 の5つに細分化）」「C 協働学習（C1 から C4 の4つに細分化）」という、学校における ICT を活用した学習場面の10の分類例が示されている。小学校国語科においては、A、B1・B2・B3、C1・C2の6つの学習場面における活用例が示され、領域としては、「書くこと」が4例、「話すこと・聞くこと」が3例、「読むこと」が3例、書写が1例示されている。学習過程ごとの活用の具体例としては、「①学習の見通しを持たせ興味関心を高める場面」として、動画、文、図、写真などをモデルとして示すこと、「②情報を収集整理し集めた情報を活用して自分の考えを形成する場面」として、インターネット等で情報を収集したり、集めた情報を選択工夫したり、比較分類関連づけしたりすること、「③考えたことを表現する場面」として、伝えたいことに適した言葉を選択したり、推敲したりすること、「④学びを共有する場面」として、児童の意見を共有して教科書で確認したり、比べたり、交流につなげたりすること、「⑤学習の内容を蓄積したり振り返ったりした場面」として、動画を撮って振り返ったり、助言したり、工夫を見直したりすることの例が示されている。

中学校国語科においては、A、B、Cの10の分類例すべての活用例が示され、領域としては、「書くこと」が3例、「話すこと・聞くこと」が3例、「読むこと」が2例、書写が1例示されている。学習過程ごとの活用の具体例としては、「①情報を収集して整理する場面」、「②情報を活用して自分の考えを形成する場面」、「③考えたことを表現・共有する場面」、「④学習の内容を蓄積したり参照したりする場面」において小学校国語科と共通する内容が多く挙げられているが、情報のデータベース化、プレゼンテーションソフトの活用、電子メールの送受信など中学校にしか示されていない活用例もある。

文部科学省「国語科の指導における ICT の活用について」<sup>(6)</sup>では、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各領域における学習過程をふまえた5つの ICT の活用場面及びそれぞれの場面に応じた国語科における ICT 活用のイメージ(例)が、より具体的に示されている。例えば、自分の考えを深める場面として、考えを表現したタブレット上の付箋やスライドを分類したり、並べ替えたり、デジタル教科書上で線を引いた重要箇所を友達と比較したり検討したりすること、知識・技能の習得を図る場面としては、古文等の録画教材を視聴して言葉の響きやリズムを理解すること、書写のデジタル教科書で点画の書き方を理解することなどである。また、1人1台端末活用例として、中学校3年「書くこと」の単元における活用例が詳細に示されている。単元の情報の収集の学習過程では文章ソフトで下書きを入力すること、内容の検討の学習過程では下書



きを共有しコメント機能を用いて確認すること、推敲の学習過程では文章ソフトの校閲機能で推敲すること、共有の学習過程ではデータを共有することなどである。その他の活用例として、小学校高学年の「話すこと・聞くこと」、小学校高学年の「書くこと」、小学校中学年の「読むこと」における活用例の1部分の3例が示されている。

文部科学省資料が示す活用事例からは、国語科におけるタブレット活用のポイントとして次の3点が考えられる。1点目は、小学校と中学校の活用の在り方の違いをふまえることである。情報化の手引きの「教科等の指導における ICT の活用 国語」の小学校の記述には、「児童の実態に応じて（中略）活用する機会を設けることは重要である」としているのに対し、中学校では「ICTの効果的な活用方法や活用場面等を積極的に考え、実践していくことが大切である」とある。小学校では、学年や発達段階に応じて、効果的な学習過程、学習場面で活用し、ICT活用の機会を作ることが求められているのに対し、中学校では、1つの学習過程、学習場面での単発的な活用だけでなく、単元の各学習過程における多様な学習場面での積極的な活用が求められている。2点目は、示されている事例の中で「書くこと」の領域が多いことである。「書くこと」の領域では、いろいろな学習過程、学習場面でのタブレット活用が想定でき、また、簡単なことから高度に工夫したものまで、児童生徒の実態や教員のスキルに応じた活用が考えられる領域であることから、多くの資料で事例が示されており、タブレット活用が十分できていない教員は、まず「書くこと」の領域で活用をスタートし、効果を実感するとよいのではないかと考えられる。3点目は、個別最適な学びにつながるタブレット活用の開発である。文部科学省資料では「個に応じた指導の充実」のためのタブレット活用、児童生徒「一人一人の特性や習熟の程度に応じた」タブレット活用について示されているが、E市の質問紙調査の効果的な活用事例報告では朗読、書写における活用の一部関連性が見られるだけで、本格的に個別最適な学習につながる実践事例はほとんど挙がっていない。これからのタブレット活用で研究開発が求められる面である。

## (2) 国語科におけるタブレット活用の効果

「教育の情報化の手引き」の4章「教科等の指導における ICT の活用」ではすべての教科に共通する効果として、挿絵や写真等を活用することで児童生徒の興味関心を高めることが可能となること、デジタル教材の活用によって個に合った進度理解や関心に応じた学びを構築することが可能となること、タブレット等を活用し交流学习を行って意見交換や発表など互いを高め合う学びを通して思考力判断力表現力などを育成することが可能になることが示されている。野中（2017）は国語科における ICT 活用の利点について、(a) 従来の黒板やホワイトボードの機能をより効率的に実現する、(b) 従来の媒体では不可能であった教材提示、情報提示を可能にする、(c) 教室内での相互交流や情報共有を活性化し、学習内容の理解を促進する、(d) 学習のプロセスや成果を把握しやすく、よりきめ細かい評価が可能になる、(e) 課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶことに寄与するという5つに整理されるとしている<sup>(7)</sup>。また今宮（2021）は、国語

科授業を通してわかった ICT 機器の効果について、①可視化できる、②時間を短縮できる、③記録を残すことができる、④遠隔での対応ができるの4点を挙げている<sup>(8)</sup>。

これらのことをふまえた上で国語科におけるタブレット活用の効果で注目すべきことは、次の3点であると考えられる。1点目は、音声など消えてしまうものを可視化したり復元したりする効果である。国語科においては、「話すこと・聞くこと」の領域における言語活動や「読むこと」の領域にける音読や朗読、話し合い活動など音声による言語活動を行うが、これらは消えてしまうものであり、児童生徒の音声言語での学習の足跡を残すことが難しかった。それがタブレットで動画を撮影し再生することなどによって、児童生徒の言語活動の蓄積や復元が簡単にできるようになり、蓄積した自分や班の言語活動を振り返って言語活動を検討したり、改善に活かしたりすることが可能になったことの効果は大きい。

国語科におけるタブレット活用の効果で注目すべきことの2点目は、考えや表現したものを共有する効果であり、今回の質問紙調査において小中学校の国語科の授業で最も活用されていた場面も「考えや表現したものを共有する」である。「主体的・対話的で深い学び」が求められている今、グループや学級全体での話し合い活動が多くの授業で設定されているが、ノートと黒板、付箋と模造紙、ホワイトボードなどによる共有に比べ、タブレットを活用すれば、より速く効率的効果的に意見を共有することができる。いろいろな言語活動の相互評価の場面などにおいても、タブレット活用による共有は効果的である。各グループの話し合いを学級全体で共有することには難しさがあったが、タブレット画面における文字の共有化と話し合いの映像での記録（可視化）を組み合わせることにより、これまで伝えきれなかったことをより具体的に明確に共有することが可能であろう。

国語科におけるタブレット活用の効果で注目すべきことの3点目は、「書くこと」における活用である。「書くこと」におけるタブレット活用においては、簡単に取り入れられるものから高度なものまで幅広い活用ができること、単発的な活用だけでなく、文部科学省の資料が示すように「書くこと」の単位を通した学習過程のいろいろな場面でのタブレット活用が可能であることなど、メリットが大きい。例えば、文の推敲のため、作文用紙の上で文字を書いたり消したりを繰り返すことは、発達段階によってはかなり難しいことであるが、タブレットを活用することで、相互評価、自己評価、推敲などの言語活動が安心して容易に効率的に行えるようになったと考えられる。質問紙調査においても「作文の推敲や清書が容易になった」「紙上で赤ペンで直すと、ぐちゃぐちゃになってくるが、タブレットだと直す方も直される方も苦痛でなかった」などの記述が見られる。また、「書くこと」における情報収集と推敲の段階では、ICTの苦手な教員でもタブレットを取り入れやすい。「書くこと」の材料を集めるためのインターネットによる情報収集や映像による取材の記録を残すことはタブレット活用としては取り組みやすく、効果が大きいものである。さらに、「書くこと」においては、タブレットを活用する段階や時間を画一的なものにせず、学習者の進度や興味関心に応じてタブレット活用をすることにより、個別最適な学び

につながる活用も考えられる。

### (3) 国語科におけるタブレット活用の課題

今宮はタブレットを活用した授業の課題として、次の3点を挙げている。1点目、教師の課題としては、ICT 活用に苦手意識を持つ教師への対応や授業における教師による活用法の格差への対応を挙げ、「ICT 活用によって短縮された時間を「深い学び」に向けてどのような活動を仕組むのかが次に考えられる課題である」としている。2点目、児童の課題としては、児童の ICT スキル格差への対応、3点目、教材作成と準備時間の確保としては、多忙な中での教師の教材作成の時間確保を挙げている。今宮の挙げている1点目、3点目の課題は、今回の質問紙調査から E 市においても課題となっていることが明らかになっている。

今回の質問紙調査から浮かび上がった課題の1つ目は、タブレット活用に対する教員の意識に関することである。質問紙調査の回答には、タブレット活用のデメリットとして、「教員の負担増」、「教員による活用時間や活用スキルの差」が小中ともに多く挙げられており、タブレット活用で困っていること、悩みにおいても、小中ともに、タブレット端末の効果的な活用がわからないことや活用を考える余裕がないということが多く挙げられている。国語科の授業において、タブレット活用が求められていることは十分わかっているが、タブレットなど ICT 機器に関する苦手意識があったり、多忙であったりすることからタブレットの活用方法を研究したり教材を作成したりすることが十分できていないという不安や悩みを抱える教員が多く存在している。本来、タブレットを活用することで、これまで国語科で行ってきた学習活動がより効率よくできたり、これまでの学習環境ではできなかったことができるようになったりすることにタブレット活用のメリットがあるのに、タブレット活用に不安感、負担感を抱えるために、タブレット活用が進んでない面がある。学校や教育委員会が行う ICT 研修は当然必要だが、こうした意識を変える対応として、タブレットを効果的に活用した国語科授業の事例の蓄積、共有フォルダに教員が作成した、タブレットで活用できる教材を蓄積して気軽に活用できるようにすること、校内において気軽にタブレット活用の授業を公開して情報交換をしたり、ICT に堪能な教員が気軽に相談に乗ったりすることなどの体制づくりが望まれる。

課題の2つ目は、タブレットの活用時間、活用方法の教員間の格差である。活用時間においては、ほとんどタブレットを活用していない教員が、小学校、中学校ともに存在していることが課題である。活用していない理由としては、苦手意識、多忙感、負担感の他、国語科で大事であると考えられる言語活動、児童生徒が手で紙に文字を書くことや対面で話し合うことがタブレット活用によって減少するからということも挙げられている。1人1台のタブレットという ICT 環境はまだスタートしたばかりであり、タブレットの活用方法の研究も端緒に就いたばかりである。このような段階においては、いろいろな学習場面でまず活用してみて、ここではタブレット活用は有効である、ここではあまり有効ではないというようなことを自分で実感することが必要であると

考える。すべてをタブレットにするということではなく、これまでの言語活動やツールとタブレットを併用する、組み合わせるという考えも重要であると考え。また、活用方法の格差については教員自らが感じており、質問紙調査のタブレット活用で困っていること、悩みにおいて、「～でしか活用していない」というような記述がある。1つ目の課題の対応として国語科におけるタブレット活用事例の蓄積を挙げたが、例えば効果的な活用を最初から求め過ぎるとこうした意見が出てきてしまい、負担感につながってしまう。まずは簡単なことから日常的に、当たり前でタブレットを活用するようになることをめざすことが必要であると考え。一方、タブレット活用への意欲やスキルがある教員には、国語科のいろいろな領域、いろいろな学習過程でのタブレット活用、特に中学校においては単発ではなく単元の流れの中でのタブレット活用の実践に取り組むことを期待したい。

課題の3つ目は、小中で挙げてもらった効果的な実践のほぼすべてが、児童生徒が同じ時間に同じようにタブレットを活用するものになっていることである。児童生徒の興味関心は一人一人異なっており、課題解決へのアプローチの仕方も進度も異なっているはずである。国語の単元のどこでどのように児童生徒にタブレットを活用させるかを構想する時に、画一的にタブレットを活用させるだけでなく、児童生徒に選択の幅を持たせることを考えることを大事にすべきである。今、学校現場に求められている「協働的な学び」「個別最適な学び」に関して、「協働的な学び」については考えや表現したものをタブレットを活用して効果的効率的に共有することに取り組んでいる教員が多いので、今後は「個別最適な学び」の実現のための効果的なツールとしてのタブレット活用に目を向け、画一的ではない「個別最適な学び」の実現に向けたタブレットの効果的な活用の国語科授業における研究実践に取り組むことが必要である。

#### (4) まとめ

文部科学省「GIGA スクール構想の推進」<sup>(9)</sup>(2020)では「ICT はあくまでツールの1つであり、「何のために・何がしたいのか」という目的が先にあり、そのための手段としてICTの選び方・使い方が決まる」としている。中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」<sup>(10)</sup>(2021)では「ICTを「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に生かす」ことや「端末の活用を「当たり前」のこととし、児童生徒自身がICTを自由な発想で活用するための環境整備、授業デザイン」の必要性などが記述されている。この中で、タブレット活用の基本的な在り方として抑えるべきキーワードが、「ツール」と「当たり前」である。タブレット活用は、目的ではなくツール、手段であること、誰もが必要な時にどの授業でも当たり前で活用できることがタブレット活用の基本となる。高橋(2021)は国語科教員に求められる1人1台端末時代の授業スキルを7点挙げている<sup>(11)</sup>が、その中の「ICTに堪能である必要はないが慣れている必要はある」(タブレットを普段使いの道具とすること)、「楽で便利な活用法を試していく」(楽で便利だから活用するという発想を持つこと)の2点は、タブレット活用の在り方における「ツール」と「当

り前」ということを端的に表している。

タブレット活用の目的は、文部科学省の資料で繰り返し記述されている「主体的・対話的で深い学び」の実現のための授業改善、個別最適化された学びの実現を通して教育の質の向上を目指すことにある。国語科の授業におけるタブレット活用においても、この目的を常に頭に置いておかなければならない。ICT活用促進のために、教育委員会は様々な形でのサポート体制を整え、各学校ではOJTを進めながら、国語科授業に最適な形で、タブレットをツールとして当たり前を活用することが日常的な姿になることを目指す必要がある。

## 謝 辞

質問紙調査にご協力いただいたE市内小学校国語主任の先生方、中学校国語科の先生方に心から感謝申し上げます。

## 引用文献, 参考文献

- (1) 文部科学省 (2019) 教育の情報化に関する手引き  
[https://www.mext.go.jp/content/20200609-mxt\\_jogai01-000003284\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200609-mxt_jogai01-000003284_002.pdf) (2023年1月30日最終閲覧)
- (2) 文部科学省 (2019) GIGA スクール構想の実現へ  
[https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt\\_syoto01-000003278\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf) (2023年1月31日最終閲覧)
- (3) OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) ～ 2018年調査補足資料  
[https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/06\\_supple.pdf](https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/06_supple.pdf) (2023年2月6日最終閲覧)
- (4) 国立教育政策研究所 (2022) 令和4年度全国学力・学習状況調査  
<https://www.nier.go.jp/22chousakekkahoukoku/index.html> (2023年3月1日最終閲覧)
- (5) デジタル庁・総務省・文部科学省・経済産業省 (2021) GIGA スクール構想に関する教育関係者へのアンケートの結果及び今後の方向性について  
[https://cio.go.jp/sites/default/files/uploads/documents/digital/20210903\\_giga\\_summary.pdf](https://cio.go.jp/sites/default/files/uploads/documents/digital/20210903_giga_summary.pdf) (2023年2月17日 最終閲覧)
- (6) 文部科学省 (2020) 国語科の指導における ICT の活用について  
[https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt\\_jogai01-000009772\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_01.pdf) (2023年3月1日最終閲覧)
- (7) 野中潤 (2017) 教育 ICT と国語教育学の課題 (1) 都留文科大学研究紀要第85集 pp.93-106
- (8) 今宮信吾 (2021) 国語科における ICT 活用の実際—小学校授業研究会を通しての一考察— 大阪大谷大学教育研究第47号 pp.15-24
- (9) 文部科学省 (2020) GIGA スクール構想の推進  
<https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/reform/ab1/20201125/shiryou2.pdf> (2023年1月31日最終閲覧)
- (10) 中央教育審議会答申 (2021) 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して  
[https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf) (2023年3月1日最終閲覧)
- (11) 『国語教育』編集部編 (2021) ICT×国語 GIGA スクールに対応した1人1台端末の授業づくり 明治図書出版株式会社